

無碍光の利益より 威徳広大の信をえて かならず煩惱のこおりとけ すなわち菩提のみずとなる
(『高僧和讃』 聖典四九三頁)

罪悪深重

—我が身を是とする生き方が問われ続けること—

第1組 景雲寺住職

鈴木 公英

text by Kimihide Suzuki

昨今、頻繁に発生する凄惨な事件について、街頭で取材を受けている方々が口々に「何の落度もなく、何の罪もない人が、なぜこのような目に遭わなければならないのか」と言われていた。偶然、同様の事を話される方が続いたせいか、「何の落度もない」「何の罪もない」という、決まり文句のような社交辞令的な言葉が耳に残り、違和感を覚えた。

この言葉は、被害に遭われた御本人のみならず関係する方々への御慰めと御労りの気持ちの意味で使われているのだと思うが、まず、被害に遭われた方のことを知っているかいないかに関係なく、必ず自分の主観（思い込み）が入ってしまうのではないだろうか。私の日常の生活でも「きっとこうであろう、こうに違いない、こうであったに違いない」と、自分の思いに都合よく考えていく。それでも、自分のその思いや考えに不安がある時は、身近な家族や友人知人に意見を求める。しかも、その中でも自分の意見や考え方に近い人、合わせてくれる人を選んでいく。

そのように、限られた範囲で自分の思いに都合よく合わせてくれる人達だけから意見をいただき、自分の正当性を主張していく。

この自分の正当性を主張する、自己肯定でしかない私の問題を御聖教から気付かされて来る。

『聖人のつねのおおせには、「弥陀の五劫思惟の願をよくよく案ずれば、ひとえに親鸞一人がためなりけり。されば、そくばくの業をもちける身にてありけるを、たすけんとおぼしめしたちける本願のかたじけなさよ」と御述懐そうらいしこと』（歎異抄 聖典六四〇頁）

自分が、自己肯定し続けていくしかない「そくばくの業をもちける身」そのものであることを本願によってあきらかにされていく。私の小賢しい考えや行いなど、とうに見透かされているにもかかわらず、同じことの繰り返しである。

「自身はこれ現に罪悪生死の凡夫、曠劫よりこのかた、つねにしずみ、つねに流転して、出離の縁あることなき身としれ」（散善義）という金言に、すこしもたがわせおわしまさず。さ

れば、かたじけなく、わが御身にひきかけてわれらが、身の罪悪のふかきほどをもしらず、
如来の御恩のたかきことをもしらずしてまよえるを、おもいしらせんがためにてそうらいけ
り（歎異抄 聖典六四〇頁）

聖人は、この善導大師の金言を「わが御身にひきかけて」、如来の本願によってしか救われない
という身の事実を思い知らされると同時に、すでに目の前に救われていく道が開かれていたことに
気付かされる。

罪障功德の体となる こおりとみずのごとくにて こおりおおきにみずおおし

さわりおおきに徳おおし（高僧和讃 聖典四九三頁）

本願によって、自己肯定せずにはおれない「そくぼくの業」を持つ我が身の罪悪性を自覚させら
れたところに、私が救われる道が開かれていく。